

1. 子どもの「急病」のとき

日頃、子どもの様子をよく観察していれば、子どもの異常には気が付きやすいものです。
子どもの様子をよく観察し、急いで受診した方がよいのかどうかの目安としてください。

発熱



すぐお医者さんへ

- 生後6ヶ月未満である。
- ひどく機嫌が悪い。
- ぐったりしている。
- 苦しそうである。
- けいれんが5分以上続いた。
- けいれんの後意識が戻らない。

診療時間にお医者さんへ

- 少し熱がある(37℃～38℃程度)。
- 下痢や嘔吐がある。
- 発疹がある。
- 鼻水・鼻づまり、せきがある。
- 食欲がない。
- 2日たっても熱が下らない。
- 夜中に突然激しく泣きだし、耳に手をやったりする。

熱があるときの手当のしかた

■ 青白く、震えているときは？

〝温める、

顔が青白く、手足が冷たくて震えているときは、熱が上がり始めているときなので、布団や毛布などですくんで温めましょう。冷やしてはいけません。

■ 熱が高く、暑苦しそうときは？

〝冷やす、

熱が上がりきり、首回りや背中が汗ばんできたときは、薄着にしましょう。

そして、頭に水枕をしたり、脇の下やももの付け根などに5

分から10分ぐらい氷嚢を当てて冷やします。(冷やしすぎないように)

ぬるま湯に浸したタオルで身体を拭いて冷やすのもよい方法です。嫌がるときは無理に冷やす必要はありません。



■ 水分の補給を十分に

熱が高いときは汗をかいたり、呼吸が速まるので水分が失われがちです。

脱水状態にならないよう、湯冷ましや番茶など飲みやすいものをこまめに与えましょう。

ジュースやアイスクリームなどはのどが渴くので与えないでください。

■ 解熱剤は安易に使わない

熱は、身体が病気と闘って免疫をつくろうとしている状態なので、無理に下げる必要はありません。

37～38℃代の発熱では、慌てて解熱剤を使う必要はありません。

○ お父さん、お母さんもうがいと手洗いを!

